

井潤裕

貝塚良雄と樺太庁博物館

はじめに

サハリン州郷土誌博物館が1937年に樺太庁博物館として建設されたことは周知の通りである。この建物が日本期建造物の中で最も有名で、かつ愛されている建物の一つであることにも異論はないだろう。日本の城郭建築を模したその外観意匠はこの島の特異な歴史やエキゾチシズムを人々に感じさせるに十分であり、また現在のユジノ・サハリンスクにとっての都市アイデンティティ(シンボル)としての役割も無視できない。ゆえに、この建物に関してはサハリンの郷土誌研究において重要な意味がありながらも、何者によっていかなる事情でこうした形態の建物が建てられたのか、建築学から見てどのような意味や歴史的背景があるのかといった、単純だが重要な問



写真1 貝塚良雄(1930年)

いには十分に答え切れていないようだ。本稿はこうした疑問に対する答えを用意し、日本の建築史研究を踏まえた上でこの建物をどう評価すべきなのかという点を論じるものである。と同時に、設計者である貝塚良雄の特質や歴史的な位置づけを明らかにしていく。なお、建物や設計者に関するデータについて既出の拙稿¹と重複があることをお断りしておきたい。

樺太庁博物館の設計者が貝塚良雄(1900-74、写真1)であることは、北海道庁文書館所蔵の樺太庁公文書(「予算資料(一) 昭和十一年度」)や元樺太庁建築技手の証言などからも明らかである。貝塚は1929年から樺太庁の廃止(1947年)まで在籍した建築技術者であり、1939年には技師に昇格している。彼の経歴に関する史料として、本人が晩年に記した自筆の覚え書き、履歴書2通、辞令6通、写真26葉が残されている²。このほか、彼の子孫や部下へのインタビューを補足史料として用いた。以下でこれらに基づいて彼の履歴をたどりながら彼の建築の特質を論じ、樺太庁博物館へと収斂していく彼の技術や経験について論じていく。

貝塚良雄の前歴

貝塚良雄は1900年1月22日に神奈川県横浜市に生まれ、地元の小学校を卒業後は神奈川県工業学校へ進み、1917年に同校を「優等無欠」で卒業した。そして、大手建設業者の一つである

¹ 井潤裕ほか：樺太庁技師貝塚良雄(1900-1974)の経歴と建築活動、日本建築学会北海道支部研究報告集、No. 71、1998年、569-572ページ；ITANI Hiroshi et al., *Building Construction in Southern Sakhalin During the Japanese Colonial Period: Buildings, Architects, Contractors and Construction Sections of Government Offices*, Acta Slavica Iaponica, Tomus XVII, Sapporo, 2000, pp. 132-160.

² これらの史料は、貝塚良雄の長男である貝塚儀高氏が所蔵している。

清水組本店に入社するも翌年7月25日には退社し、8月1日付で神奈川県庁に入庁した。翌年に技手に昇格しているが、入庁後まもない時期の仕事については判然としない。建築技官としての修業時代と考えるべきであろう。その後1923年9月に関東大震災があり、横浜も大きな被害を受けた。貝塚もしばらくはその復興事業に携わっていた³。神奈川県庁時代において、彼が自筆の覚え書きに記した建物は次の3件である。(カッコ内は工期)。八幡橋(磯子)警察署(1924.7-1925.5)、鎌倉師範学校(1925.8-1926.2)、加賀町警察署(1927.4-1927.11)⁴



写真2 加賀町警察署(1927年)

このうちで加賀町警察署(写真2)については覚え書きに「設計及工事監督に■し、附帯設備共其の責を負ふ」とあり、貝塚の遺品中に竣工写真があることからある程度中心的な役割を果たしていたと見るべきであろう。さらに、鎌倉師範学校は木造ながら和風意匠を施していた点が注目される。



写真3 鎌倉師範学校庁舎(1926年)

というも、この工事で本格的な和風意匠を手がけたことが、後に樺太庁博物館のための貴重な経験になったと考えられるからである。また、「覚え書き」から各工事について彼の関与の程度を見ると、「設計の一部」「工事監督」「附帯工事」「現場施工図面」「機械設備」という語が並んでおり、彼の役割は主任技術者(*chief designer*)ではなく助手(*assistant engineer*)としての性格が強かったことがわかる。

このほか、貝塚の覚え書きにないものの、彼の在籍時に竣工した神奈川県庁舎(1929年)も、博物館と同じ「日本趣味」の建築であり、これを間近に見ていたという「経験」も無視できない。

樺太庁への出向が打診されたのはおそらく1929年春頃で、相当に思い悩んだようだが「樺太なら好きだけ建物を建てていい」という言葉が彼の態度を決めた⁵。すなわち、彼は辺境である樺太の地に赴くことで初めて主任技術者としての地位を手に入れたのである。1929年5月30日付で貝塚良雄は樺太庁に出向した。

さて、樺太庁時代の経歴について述べる前に、貝塚が入庁する前後における樺太庁の建築組織について簡単に論じておく必要があるだろう。この1929年という年は、樺太庁の建設事業

³ 彼の履歴書中に「大正12(注:1923)年10月 臨時震災救護事務局神奈川支部書記」とある。

⁴ 工期は履歴書による。鎌倉師範学校は横浜国立大学教育学部の前身であるが、この校舎は戦争により被災している。また、加賀町警察署は近年まで現存し、紆余曲折を経て1997年に取り壊されたが、旧庁舎の外観を尊重しその形態イメージを保存する形で再建された。

⁵ 大村美美江の証言による。これは樺太庁への出向を薦めた発言だが、発言者については未詳。

の中心が土木から建築へと転換する時期であった⁶。(もっともその時期は1930～31年をピークと
するごく短いものであった。) 当時所属していた建築技術者の首席は技師石井佐賀恵であった
が、彼は専ら予算折衝などの事務職を担当し、建築の実務には関与していなかったようだ。貝
塚はその俸給から判断してこの石井技師に次ぐ位置にあり、栄米治や林幹太郎とともに建築技
術者の主力として期待されていた⁷。この樺太庁時代において、貝塚は樺太庁中央試験所本館
(1933年)・同温室(1934年)・樺太庁会議室(1935年)・樺太庁博物館(1937年)の新築工事において
主任技術者を務めた。これらはいずれも現存しており、貝塚の技術者としての優秀さをよく示し
ている。以下順に、彼のがけた建築について言及していく。

樺太庁中央試験所本館

樺太庁中央試験所本館(写真3)は、貝塚にとって最初の建築であるばかりでなく、博物館と並び代表作というべきものである。中央試験所は、農林畜産工業の試験施設を集約して、各種産業振興のための調査研究を行うために1928年に新設された研究施設であり、豊原と小沼との間で誘致合戦が起こるほど当時の島民の期待が高かったことが知られている⁸。各部門の研究員が多数常駐し、農場をはじめとする多数の附属施設を必要とするため、必然的に大規模な建設プロジェクトとなっていた。貝塚の覚え書きには「三ヵ年継続事業にて一切の設計及工事監督の責を負ふ」とあり、彼は着任早々でその主任技術者として設計と現場監督を任されていた。貝塚の覚え書きでは、この建築について「農鉱工水産化学、総合試験所なる為全国試験所の長を取り、特に寒地建築適応の特種設計とす」とコメントされている。貝塚が本館の設計にあたりかなりの事例研究をおこなったことがうかがえる。完成予想



写真3 樺太庁中央試験所本館(1933年)



写真4 本館正面外壁の水平帯

⁶ 1920年代で最も大きな建設プロジェクトであった大泊の港湾建設と豊原真岡間の鉄道工事が1928年に完成しており、大規模土木事業に一区切りがついていた。

⁷ 栄米治は1928年に東京美術学校を卒業後に入庁、林幹太郎も1925年に南満州高等工業学校を卒業したばかりでいずれも若く、必然的に貝塚にかかる責任は大きかった。

⁸ 1929年の樺太日日新聞を通読すると、樺太庁中央試験所がはたして豊原か小沼のどちらに建設されるかが連日の話題となっていた。



写真5 ステンドグラス



写真6 現状正面外観(2005年)

図を載せた新聞記事では「建築様式はインターナショナルスタイル頗る近代風の三階建である」と紹介されている⁹。

中央に塔屋を配した左右非対称の外観は、白色(もしくはこれに近い色)で統一され、これまでの樺太庁建築では全く見られなかったモダンデザインが採用されている。それは「新しい科学技術の殿堂」という施設の位置づけを十分に印象づけるものであり、同時期に建てられた豊原郵便局(柳澤金次郎、1930年)や、樺太庁豊原医院(芦崎源策、1931年)とともに、新しい時代の象徴にふさわしい建築の一つといえた。

初田亨は日本におけるインターナショナルについて「一九三〇(昭和五)年を境にして、四谷第五小学校(1934年)など、装飾性の少ない平滑な白い外壁をもった建築が建てられていく」としており¹⁰、日本インターナショナル建築会の発足が1927年であることを考えても、貝塚の試みは比較的新しいものであったといえる。ただ、

この建築が厳密な意味でインターナショナルスタイルかと言えば、決してそうではない。貝塚はおそらく、インターナショナルスタイル(国際建築)の理念について十分に理解しておらず、外見をそれに似せただけである。それを象徴するのが外観正面の長い水平帯によって連続性を強調された格子窓である(写真4)。また、玄関部のテラコッタ装飾、踊り場のステンドグラス(写真5)、所長室の重厚な設えなど、要所に施された細部装飾も、国際建築様式の枢要な理念である「装飾の否定」と矛盾する。さらにいえば、寒地建築適応という概念そのものが、国際建築のめざす普遍性と相容れない存在である。その意味で、この建築はインターナショナルスタイルを強く意識してはいるものの、その様式を正確にふまえているとはいえない。だが、貝塚がこの建築

でめざしたものは国際建築の理想などではなく、「寒地建築適応」という言葉に示されたように、横浜で培われた自らの技術的経験を樺太庁の建築の中でどのように活かしていくかにあった。

⁹ 「近く建築に着手される樺太庁中央試験所の本館」『樺太日日新聞』1930年4月19日付。

¹⁰ 初田亨『想像と模倣の空間史 新訂版』彰国社、2005年、151ページ。

貝塚の建築家としての特質が芸術家肌の建築家(architect)ではなく、技術者(engineer)としての性格が強い設計者(designer)であったということを示す建築である。また、貝塚が積極的な事例研究を前提として「最新流行の」建築様式を取り込もうとする性格をもつ設計者であることも明らかになった。

とはいえ、ここではインターナショナル風の外観をとったことで全体的に装飾が抑制されたために、かえって細部意匠を一層効果的に見せていることに注目すべきである。また、研究室に備え付けのテーブルや実験装置などにも水平帯を用いた同一パターンの装飾を随所に用いられ、意匠的統一が図られていたことも特筆に値する。抑制された装飾性の中で効果的に用いられた細部意匠のバランスは、彼の造型感覚の冴えを示すものでもある。こうした造型感覚は後に樺太庁博物館でより積極的に活かされることになる。

樺太庁中央試験所本館は戦後ロシア科学アカデミーが利用し、海洋地質学地球物理学研究所となっていたが、2001年から警察官の養成施設に貸与されている。この際に行われた改装工事により、水平性を強調した竣工当初の外観は大きく損なわれた。とくに正面玄関上部に木造の下屋が付加されたこと大きい。また、インターナショナルスタイルを模したであろう独特の格子窓も現在ではすべて取り替えられている(写真6)。それまでは貝塚の意図した外観意匠がほぼそのまま継承されていただけに今回の改装が惜まれる。

樺太庁中央試験所温室と樺太庁会議室

しかしながら、貝塚について語る場合、こうした造型感覚だけではなく、技術者として追求された建築の性能も重要である。次にてがけた中央試験所の温室(写真7)では後者の資質が如実に現れている。この温室は試験所本館の南隣に建設され、大きな施設ではないが、貝塚が覚え書きの中に列挙していることから、彼にとっては特筆すべきものであったことがわかる。その覚え書き中のコメントには「吹雪と耐寒保温に関し寒地最適の創意設計をなす」と記されており、極北の地で建設したこの温室の性能に大きな自信を持っていたことがうかがえる。現状の温室は幾分改変がなされているものの、半世紀以上を経た現在でも温室として機能しており(写真8)、その性能は間接的に証明されているといえる¹¹。さらに、「窓の開閉はオペレーター装置とす」とも記されており、温室のガラス

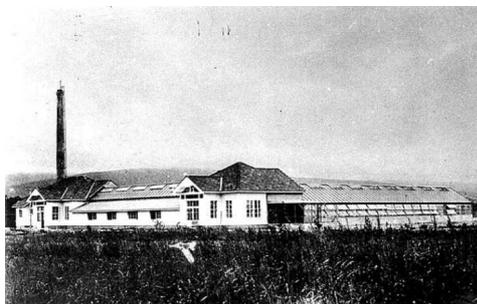


写真7 中央試験所温室(1934年)



写真8 温室内部(2001年調査時)

¹¹ 2005年11月の調査時において、この建物が火災によって大きな被害を受けたことが判明した。サハリン州郷土(誌)博物館のM. A. サマーリンによれば、この火事は2003年に起きたものであるという。この火事により、温室としての機能はほぼ喪失している。

窓部分をすべてレバーアクションでコントロールできるようになっていた。また、この温室においてもガラス室へのアーチ開口部(写真9)は、独特の曲線を描く美しいもので、貝塚の造型感覚の賜物であることも付言しておかなくてはなるまい。この温室は、外見は地味でありながら貝塚の技術水準の高さを物語る上で欠かせない建築である。



写真9 温室開口部アーチ

こうした貝塚の技術力を示す建築がもう一つあり、それが現在軍事裁判所となっている樺太庁会議室である(写真10)。1934年2～12月に建設されたこの建物は、2階窓欄間部分を半円アーチとしているのが特徴的である。建設当時の樺太庁庁舎はいまだに明治期(1908年竣工)の木造建築で、狭隘な上に老朽化が深刻化していたために庁舎新築計画が提出されたものの、紆余曲折を経た後に予算の都合で見送られた。この会議室は新庁舎の代替案として建設されたものであった。



写真10 旧樺太庁会議室(2005年)

この建物に関する貝塚のコメントは「二階大広間梁間12.6米、一階事務室、地下食堂暖房機関室、煙突高20米」と概略を簡単にまとめたものに過ぎない。だが、半円アーチ窓の並ぶ簡素ながらも端正な外観は、70年以上の歳月を経てもほとんど損なわれていない。内部は「大広間」と称された大会議室部分が改変されていることが惜しまれるものの、階段室廻りなどの表現主義的な昭和モダンの装いはよく残されているようだ(写真11)。これは樺太庁の建築技術の水準を最も鮮明に見せてくれる記念碑といえるし、こうした技術力の高さは樺太庁博物館の造形美も支えている。



写真11 同階段室

樺太庁博物館

樺太庁会議室の竣工後まもなく、貝塚は樺太庁博物館(写真12)の設計作業に入っている。それまでの樺太庁博物館は、樺太守備隊司令官のために建てられた官邸を陸軍から借りて利用していた¹²。だが、豊原に憲兵隊を置くことが決定し、この建物がその司令部に利用されることが決定したため、急遽博物館のために新しい建物が必要となった¹³。

¹² この建物は1908年11月に竣工したユジノ・サハリンスクで最も古い建築の一つで、現在 Военный суд Южно-Сахалинского гарнизонаとして利用されている。

¹³ 「憲兵分隊設置から博物館移転 新築問題漸く台頭」『樺太日日新聞』1934年3月1日付。

樺太庁博物館に対する貝塚のコメントは「建物、電気設備、陳列ケース、衛生設備共設計及工事監督主任者として一切の責を負ふ」というものである。つまり、実施レベルでの決定はほとんど貝塚に一任されていたようだ。ここでいう貝塚の手による陳列ケースのいくつかは現在も展示品とともに目にすることができる。



写真 12 樺太庁博物館(1937年)

貝塚は博物館の意匠に関して「日本城郭風和洋折衷式」で「破風造りの為め梁束合掌式鉄筋コンクリート架構とし屋上に天窗を設け、外観美の表現に意を用ふ」とコメントしている。すなわち、鉄筋コンクリートで伝統的な木造建築の部材を製造し、これを在来構法に近い形で建設したということである。こうして天守閣のもつ造形美を綿密に再現し、模式化された和風意匠では作り出すことの難しい伝統的な風格を写しとることに成功している。また、実物を見ると天守閣をむしろ低めにする事で外観の水平性と重厚感を強調しているという印象を受ける。



写真 13 外観正面現状(2001年)

おそらく樺太庁博物館は他の日本趣味建築と比して階高が低いため、垂直性よりも水平性を強調した方がよいと判断したのではないか。

この天守閣を中心として意匠的なアクセントは中央部に集中しており、これにより見る者の関心は中央部に自然と引き付けられる(写真13)。建物のシンボルである天守閣の脇を固めるように、低めの卯立のような突出部が設けられ、これに小さな妻屋根をかけることで千鳥破風の天守閣と合わせて三角形の構図をつくり、視覚的な安定感を生み出している。さらにその下には瓦屋根を見せる切妻平入の正面車寄せがあり、リズムカルで変化に富んだ上昇感のあるファサードを構成している。こうした重厚感を強調した水平性と、中央部における複雑な変化と上昇感を伴う垂直性のコントラストは、博物館の外観美を構成する構図的原則である。一般的に日本趣味建築では下部の洋風意匠と上部の和風屋根がうまく調和しない例が多いが、博物館の場合は壁体を漆喰風の白壁、スクラッチタイル、城壁を彷彿とされる切石貼りの3層構成にすることで、比較的うまく処理されている。



写真 14 正面玄関天井部



写真 15 背面部外観(1996年調査時)



写真 16 旧貴賓室の格天井



写真 17 トップライト(1996年調査時)

また、意を凝らした細部意匠にも注目すべきであろう。鬼瓦・懸魚・鼻隠しといった正統的な伝統意匠はもちろん、車寄せ天井に設えられた網代風のモールディング(写真14)や鉄扉、背面バルコニーの開口部(写真15)など随所に細心の注意を見ることができる。だが、これらの細部意匠のほとんどは無作為でも無秩序でもなく、原則的には建物の格式の高さを表現するために慎重に吟味され、造型されたものである。この建物が有している独特の緊張感や権威性は、日本の伝統的意匠が醸成してきた有機的な秩序を現代建築の中で巧妙に転化しているところに由来する。(もちろん、厳密な意味で城郭や書院といった伝統的な建築空間の秩序を完璧に踏襲しているわけではない。)

内部の意匠を見ても、格式を重視する性格は外観と異なるものではない。とりわけ貴賓室とされた2階中央部には釘隠しや格天井といった格式を整える細部意匠が現在も保持されている。この博物館は来島する貴顕が必ず訪問する施設であるため、こうした配慮には大きな意味があった。また、床の部材を図面から検討すると、事務室や廊下などは「リノリューム貼」であるのに対して各展示室は「厚木製ブロック」となっている。これは防音を考慮したもので、同様の配慮は「防音のため壁面衣張」とした貝塚のコメントにあるように、内壁を布貼りにして反響音を抑えるという点にも現れていた。現在の内壁にこの布は用いられていないが、かつて用いられた布は博物館に保管されている。

また「屋上に天窗を設け」というコメントがあるように、2階部分の展示室にはトップライト(天上に開けられた窓)があり、非常に明るい展示空間となっている。だが、博物館という施設特性を考えるなら、このような形で自然光を

多く取り入れるのは展示品の保存という点でデメリットになる場合もあり、一概に称賛の対象と

はならないようだ。この点では貝塚の努力が裏目に出ている感があり、むしろこの建物の僅瑕といえるかもしれない。

現状を見ると、さすがに細部意匠の少なくない部分が時間的な問題で劣化・損傷を余儀なくされているものの、前述した会議室に見るような高い施工精度がなければ、現状のコンディションを維持することは難しかったであろう。これには工事監督を兼任した貝塚の厳格な現場管理が大きく反映している。これに関しては一つのエピソードがある。娘の大村芙美江によれば、樺太庁博物館の新築工事の際、彼は現場でステッキを持ち歩き、漆喰塗りの内壁を入念に調べ、出来が悪ければ「そのステッキをズブズブと刺し込んですべてやり直させた」という。施工業者がたまりかねて家族に懇願するほど、彼の施工監理は「業者泣かせ」で厳しかったようだ。だが、こうした妥協のなさが博物館の質を語る上で不可欠の要素であることも確かであろう。

ともあれ、貝塚がこの建物でなした達成を単にサハリンの名建築の一つとして片づけてしまうのはあまりにも惜しい。施工精度に見る技術水準の面や、貝塚自身が誇示した外観美など意匠的な面においてもこの建築の持つ建築史的な意味は大きく、日本の様式建築の最終形である日本趣味を代表する名作の一つと評しても異を唱える者は少ないだろう。

最後に博物館の現状についてであるが、周知のように日本期建造物の中で最も良好な状態を維持している建築の一つであることは議論の余地がないものの、内部の配色が日本趣味とは相容れない状況になっているのが惜まれる。この建物は、意匠的な意味での達成が建築的な価値を大きく高めているため、可能な限り貝塚の意図した竣工時の姿を保全していくべきであり、また、2005年より文化財として本格的な修復事業が開始されたことは歓迎すべきである。

樺太庁博物館の様式と背景

樺太庁博物館の建築様式は一般に「帝冠様式」と称される。この名称からイメージされるように、昭和の暗い時代の象徴として否定的に語られることが多かったのだが、これは後代の呼称であり、当時は「東洋を基調としたる日本趣味」あるいは「日本趣味」などと称されていた。この様式名を用いた最初の建築として有名なのが神奈川県庁舎(小尾嘉郎・神奈川県庁営繕課、1929年)である。帝冠様式とされるのは、おもに庁舎建築に瓦葺きなどの屋根をかけたものであるが、これ以外にも和風の要素をとり入れたコンクリート造建築は多数ある。たとえば、明治神宮宝物殿(大江新太郎、1921年)、歌舞伎座(岡田信一郎、1924年)や震災慰霊堂(伊東忠太、1930年)などがあるし、他にも琵琶湖ホテル(岡田信一郎、1936年)など、外貨獲得のために各地で建設された国際ホテルも「日本趣味」の一例だが、それらは帝冠様式とは呼ばれない。実際的に両者を分かつ差異性は意匠・形態といった側面ではほとんど存在しない。多分に恣意的な分類であり、一部をことさらに帝冠様式とするのは不自然である。

実を言えば、こうした「日本趣味」に関してはおしなべて当時から建築家の批判が多い。八束はじめの近著がこうした批判を丹念に検討しているのでこれを援用すると、「木に竹を接いだような」(伊東忠太)、「形式から出発した変態的設計」(新名種夫)、「自由主義的資本主義的建築

思潮の生んだ私生児」(前川国男)などである¹⁴。これらは樺太庁博物館を直接批判したものではないにせよ、この様式が公的な支持を受けていたとは明らかに言えない。帝冠様式と呼称される建築の多くが、貝塚のように中堅クラスの建築技術者の設計によるか、あるいは大半がコンペ(設計競技)によって民間の建築家たちの手で成立したものであることも無視できない。八束のいうように「彼らのごく自然にかつ政治的に、民族的アイデンティティを求めただけ」であり、「建築様式の統制が早々に整備されたかのような主張は、画一化された全体主義という後のイメージからの逆読みに過ぎない¹⁵」という意見が妥当のように思われる。もちろん、設計者の意図は別に、この博物館のもつモニュメンタルな外観意匠が社会的文化的にどのように認識され、機能していたかは独立して議論されなければならないだろう。だが、「日本趣味」を「帝冠様式」と呼び換えることで、あたかも当初より政治的意図があったかのように見せかけようとする命名者(概して戦後に活躍するモダニスト)たちに迎合するのは早計である。

また、この建築を満州の官衙建築などと対比する位置づけにもあまり賛成できない。貝塚は事前の事前研究を重視し、最新の建築思潮に敏感に対応する設計者であった。樺太庁博物館の外観意匠を検討すると、明らかに東京帝室博物館の設計競技当選案(実施案ではない)から玄関部分を引用しているし(写真18)、全体構成はむしろ愛知県庁舎(愛知県営繕課・渡辺仁・西村好時、1938年)との関わりを指摘しうる(写真19)。性能面では「寒地建築適応」をめざし、意匠的にはむしろ地方性を脱却して「中央」との連関性を重視していたとみるべきである。

樺太庁博物館がこの「日本趣味」様式を採用した理由はやはり事例研究の成果であり、上野の東京帝

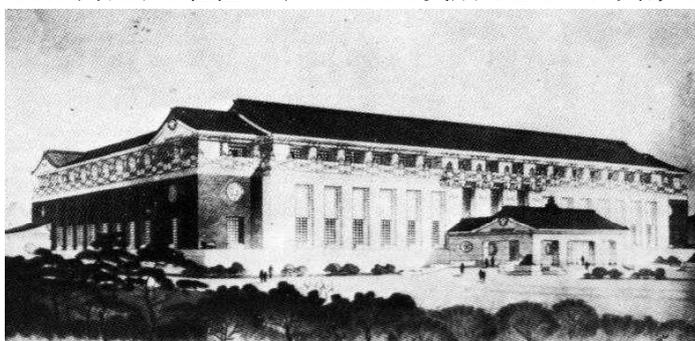


写真 18 東京帝室博物館設計競技 1 等当選案



写真 19 愛知県庁舎 正面外観

室博物館(渡辺仁、1937年)や京都市美術館(京都市営繕課、1933年)など、当時の博物館建築がおしなべて「日本趣味」を採用していたことに由来する。(たとえば、もし帝室博物館などが洋風の赤煉瓦建築であったなら、樺太庁博物館もそれに近い外観をとっていたであろう。)これらについては展示品に伝統工芸品が多いことから、それにふさわしい外観をとるべきだという配

¹⁴ 八束はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店、2005年、382、393、397ページ。

¹⁵ 同上、390ページ。

慮であった。また、日本趣味が用いられた背景として、敷地が名古屋城址に隣接するとか、鶴岡公園内であるなど「風致上の配慮」が指摘されている。(樺太庁博物館の場合も、敷地が樺太神社の御料地であったという説明がされているものの背景事情としては弱い。むしろ敷地背面(南側)に建設された豊原武徳殿(栄米治、1935年)との兼ね合いを見るべきであろう。) 樺太庁博物館が来島者が必ず訪れる観光スポットとして設定されていたことを考慮すれば、その外観表現に重きを置いた理由はむしろ「島外者対策」に主眼があったのではないだろうか。つまり、来島者に対して樺太の近代性をアピールする意味で、「中央」と遜色のない博物館を目指したのではないか。それは中央試験所本館についても該当する議論であり、そもそも神奈川県庁から貝塚を抜擢した理由が、札幌や仙台で養成された技術者にはない「中央性」であったとも考えられる。貝塚はこの博物館でその責務を十分に果たしていたのである。

樺太庁博物館以後

1939年に貝塚は高等官である建築技師に昇格したが、大陸での戦争の激化に伴って1937年10月11日に施行された「鉄鋼工作物築造許可規則」により、軍需以外の大規模建築工事はほぼ不可能な状況になっていた。だが、建築技師への昇格と呼応するように、貝塚には嘱託としての業務が増えていた。貝塚自身が保管していた辞令は以下の6通である。「警察部警防課兼務主任技術者(1939年5月25日)」、「文部省電波物理研究所設計及監督嘱託(1942年1月27日)」、「樺太労務協会専門委員(1943年1月15日)」、「豊原通信局営繕事務嘱託(1943年7月29日)」、「気象官署営繕事務嘱託(1943年11月21日)」、「日本赤十字社樺太委員部敷香療院嘱託(1944年4月8日)」ただ、これらの辞令に関わる建築については「戦時バラック」と称された簡易建築であった可能性が高く、覚え書きでは全く言及されていない。

貝塚がその覚え書きに記した最後に記されたものは樺太庁の新庁舎であった。貝塚によれば新庁舎は「鉄筋コンクリート地上5階地下1階」で計画されたもので、その第一期工事として地上2階地下1階部分が1944年6月から1945年6月にかけて建設されたようだ。(前述の建築規制をいかなる特例で免れたのかは興味深い疑問である。) 覚え書きには「カーテンウォールシステム¹⁶」を採用し、「耐寒の為め外壁内部に煉瓦を以って中空壁を設け、暖房用温度の保持を計り、燃料節約を行く考案をなす」とのコメントがある。だが、この新庁舎についてはほとんど何もわかっていない。所在地については樺太庁会議室と同じ「豊原東5条南4丁目」と覚え書きにある通り、1942年に焼失した樺太庁の敷地に再建されている。この地には現在軍用施設となっているが、この中の建物の一つが貝塚の建てた新庁舎を利用したものだという可能性を今のところ否定できない¹⁷。というのも、貝塚のいうようにカーテンウォールシステムを採用したのであ

¹⁶ 外壁を軽量化して構造的役割を持たせず、柱や梁で構造体を構成する建築をさす。

¹⁷ 2001年にユジノ・サハリンスク市民を対象として日本期建造物に関するアンケートを実施した際、99名中16名が「Штаб армии(陸軍司令部)」は日本期建造物であると回答している。これは前出の樺太庁会議室を指す可能性もあるが、軍事裁判所という回答は別個に存在するため検討の余地を残している。

れば、躯体を温存して外壁を更新の方が合理的だからだ。

第二次世界大戦終焉後の数年が貝塚にとって最も苦難の時期であったろう。彼の家族は45年8月に北海道へ逃れることができたが、彼自身はサハリンにとどめられた。大村芙美江によれば、焼却された樺太庁や軍事関連施設の設計図のリライトにあたっており、1947年に貝塚が横浜に戻ったとき、以前は黒かった貝塚の髪はすっかり白くなっていたという。こうして彼は無事に横浜に戻ることができたが、出向以前に在籍していた神奈川県庁に彼の居場所はなかった。結局、彼は幼馴染みの縁で加藤組という土木事業を専門としていた建設業社に就職し¹⁸、新設された建築部門の責任者として第二の人生を送った。だが、この時期の建築について彼自身は何も語っていない。そして1974年に生涯を終えた。彼はサハリン以外の地で思うままに建築を設計する機会は得られなかったのである。

おわりに

結論として、樺太庁博物館で貝塚がなした建築的達成は、文化遺産として後世に伝える価値を十分に持っていると言言できる。

最後に、より重要なことは、この建物が日本とロシア双方にとって美しいということである。貝塚がつくりあげた「外観美」は今もその魅力を失っていないし、これからも失われることがないだろう。その美しさの背景には、設計者である貝塚のすぐれた技量と経験、それを実現しえた技術水準があることは重視すべきではあるが、他にいかなる議論を用いてもおそらく「この美しさは後世に伝えていくべきである」という結論にしかならないだろうし、それだけで十分だとも思うのである。

写真出典

写真1-2、12 個人蔵(貝塚儀高)

写真3 安藤写真館(豊北村)『樺太庁中央試験所本館落成記念写真帳』(私家版)、1933年

写真4-5、10-11、14-17 北海道大学建築史意匠学研究室

写真6、8-9、13、18 個人蔵(井潤裕)

写真7 樺太庁編『樺太庁施政30年史』1936年

写真19 個人蔵(原朋教)

(本稿作成にあたり、写真3については、稚内市立図書館から、写真19については原朋教氏(北海道大学大学院工学研究科 都市環境工学専攻 建築史意匠学分野 博士後期課程)から提供をいただいた。ここに改めて謝意を申し上げたい。)

¹⁸ 以前の拙稿において、加藤組を小さな土木請負業者と表現したが、これは筆者が土木業者に疎いために犯した過ちであった。加藤組は土木系の建設業者としては神奈川県下でも有数の規模を持ち、歴史と実績のある企業であるとの指摘をいただいた。この場を借りてお詫びと訂正をしておきたい。